

「セトラー・コロニアリズムとアメリカ合衆国
-不可視化される先住民族と核開発-」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石山, 徳子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20206

「セトラー・コロニアリズムとアメリカ合衆国

——不可視化される先住民族と核開発」

石山 徳子

一・アメリカは「偉大な国」なのか

二〇一六年のアメリカ大統領選挙でドナルド・トランプの当選が決まったとき、日米両国の研究者やジャーナリストの多くは驚きの声を上げた。知的な語り口の前大統領とは対称的に、移民や女性にたいして差別的な暴言を繰り返してきた彼は、自由と平等を標榜してきたアメリカ合衆国（以下 アメリカ）の大統領には似つかわしくないというのが、大手メディアによる評価だった。私が一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけての留学時代に

知り合った友人の大半も、トランプ大統領の誕生に動揺し、Facebookには怒りと戸惑いの投稿があふれた。怒りの根底には、露骨な差別発言にたいする嫌悪感とともに、「トランプはアメリカ本来の理念に逆行する人物である」という意識があったように見受けられる。

報道各社が作成した投票動向を示す地図からは、富が集中する沿岸部の大都市圏と、それ以外の地域のあいだを走る亀裂が見える。ただし、アメリカは本来、民主主義を尊び、世界のお手本にもなるべき模範国家なのだという強い自負と、「メイク・アメリカ・グレート・アゲ

イン(アメリカを再び偉大な国に)」というトランプ・キャンペーンが掲げた標語はつながっている。二つの流れの重なり、そしてズレが、この国が抱える困難の本質を示しているのかもしれない。

本報告では、近年の先住民研究や人種研究の分野で議論が盛んに行われているセトラー・コロニアリズムという概念をキーワードに、アメリカの核開発の現場で何が起きているのか、フィールドワークで得た知見を軸に話をした。核開発を牽引してきた「偉大な国」で、社会的に弱い立場にある人びとの土地が、国の安全保障のために「犠牲区域」と規定され、環境汚染の最前線に置かれてきた経緯、さらにはセトラー・コロニアリズムに根ざした国家の成り立ちそのものを見るならば、トランプ政権の誕生もさほど驚くべきことではないのだ。

二. セトラー・コロニアリズムの国

二〇〇〇年代に入って以降、セトラー・コロニアリズムという、一般的には耳慣れない言葉が、人種研究や先住民研究の学会でよく聞かれるようになった。「入植植民地主義」、もしくは、「定住型植民地主義」とも訳され

る概念だ。セトラー・コロニアリズム研究は、西欧世界がいかに旧植民地を他者化した上で自己を確立し、支配関係を築いてきたのか、歴史的、文化的な文脈から批判的に検討するポスト・コロニアリズムの思想と、問題意識を共有している。しかしながら、特に先住民研究の分野においては、「ポスト」、すなわち「その後」という言葉にたいして抵抗が強い。なぜなら、例えばアメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、イスラエルの地理空間において、征服者はそのまま入植し、新しい国家を設立し、現在に至っているからだ。

セトラー・コロニアリズムの国家の成立の前提は、入植者が先住民の土地を収奪し、これを自らが所有することである。宗主国に戻ることもなかった入植者は、「新」大陸で身体的、文化的なジェノサイドを繰り返した。このプロセスは、かつての帝国主義国家が植民地の労働力と資源を搾取し、これを母国の政治経済力の強化を図る糧としたのとは異なる。セトラー・コロニアリズムの系譜は、先住民の存在そのものがかき消され、まるで過去に滅びた民族であるかのような幻想にあふれた現代につながっている。

三、核開発の暴力

私は一九九〇年代後半から、人文・政治地理学の研究者として、アメリカ西部における核開発の現場を訪れている。軍事目的を基点とする核開発の各段階、すなわち原子爆弾製造を目的としたマンハッタン計画、原料であるウランの鉱山、核実験場、放射性廃棄物の中間貯蔵施設や永久処分場の候補地には、それぞれ現場があり、そこで生活する人びとが存在する。核開発現場の大半は、都市圏から離れたいわゆる「僻地」で、周りには貧困に苦しむ先住民が多くいる。一般社会から孤立し、環境破壊の余波に苦しむ現場を歩き、人びとの話に耳を傾ける作業を続けていけばいくほど、「偉大な国」という言葉は空虚に響く。

本報告では、一九四三年にマンハッタン計画の一環として建設されて以降、冷戦期にかけてブルトニウムの生産拠点として機能し、現在も除染作業が続くハンフォード・サイトの歴史地理を、セトラー・コロニアリズムの文脈に位置づけて検討した。ワシントン州東部の乾燥地帯を流れるコロンビア川沿いに位置する同サイトは、もともとワナパム族やヤカマ族を含む複数の先住民の居

住、狩猟、採集、交易の圏内にあった。諸部族は、国家権力のもとに先祖伝来の土地を奪われ、アクセスを禁じられ、さらには放射能汚染の現場にされてしまった痛みを抱えて生きている。彼らによる除染作業への参加、および除染後の土地の使用権をめぐる要求は、植民地主義への抵抗の営みと捉えることもできる。

核開発に不可欠な弱者を国家が切り捨てる構造と、これをもとに築かれる「豊かさ」への欲望こそが、トランプ大統領をうみだした背景にあるのではないか。そして、これに抗う先住民の営みから、私たちはいったい何を学ぶことができるのか。こうした問いについて、和泉キャンパスに設けられたテントという不思議で魅力的な空間に集まって下さった方々に報告を行い、ともに考え、意見交換ができたことに心から感謝している。テント企画を続けて下さる丸川先生、貴重なコメントをくださった森永先生、そして、ハツとするような質問をして下さった来場者の皆さま、ありがとうございました。